【百合×下剋上】

見下していた地味な図書委員に裏垢バレて、イキり処女ギャルが泣きながら発情させられるまで

テイク書房

さかの　あやめ

第1章：日常と、ギャルの油断

放課後の旧図書室。

すでに使われなくなったカビ臭いこの部屋は、一部の生徒にとって格好のサボり場所になっていた。

西日が差し込む窓際で、赤城莉奈（あかぎ りな）は退屈そうにスマホの画面をスクロールしていた。明るく染め上げた金髪、短く着崩したスカート。クラスのカーストトップに君臨する彼女にとって、学校などただの暇つぶしの空間でしかない。

「あー……マジでだるい。なんか面白いことないの」

不機嫌そうに呟いた莉奈の視線の先には、一人の女子生徒がいた。

三つ編みにした黒髪と、度の強い分厚いメガネ。図書委員の白石栞（しらいし しおり）だ。

彼女は部屋の隅で、莉奈に命じられるまま、ホコリを被った古い本を段ボールに詰める作業をさせられていた。

「おい、白石。手ぇ止まってんだけど。あたしが帰るまでに全部片付けろって言ったよね？」

「ひっ……！ ご、ごめんなさい、赤城さん……。すぐ、やりますから……っ」

ビクッと肩を震わせ、栞は怯えた小動物のように縮こまる。

その姿を見た莉奈は、嗜虐心を刺激されたように意地悪な笑みを浮かべ、コツコツとローファーの音を鳴らしながら栞に歩み寄った。

ドンッ！
「ひゃあ……っ！？」

莉奈は本棚を背にした栞のすぐ脇に手をつき、いわゆる「壁ドン」の体勢で逃げ場を塞いだ。

至近距離で見下ろされる圧迫感に、栞は顔を青ざめさせてガタガタと震え出す。

「あんたさぁ、ホントどんくさいよね〜。見ててイライラすんだけど」

「ご、ごめんなさい……ごめんなさい……」

「謝ってばっか。てか、そのダサいメガネと三つ編み、いつの時代の人間って感じ。そんなんじゃ、彼氏とか一生できないよ？ あ、もしかして男の人と手も繋いだことないんじゃないの〜？ ウケる」

莉奈は栞の三つ編みの毛先を指で弄りながら、鼻で笑った。

クラスの底辺である地味な女をからかい、優越感に浸る。
莉奈にとって、それは日常のありふれた暇つぶしの一つに過ぎなかった。

栞は俯き、分厚いレンズの奥で視線を泳がせながら、ただひたすらに耐え忍んでいるように見えた。

「……ま、精々あたしの機嫌損ねないように、そこで大人しく埃まみれになってなよ。じゃーね、底辺ちゃん」

完全に相手を見下しきった莉奈は、満足げに踵を返そうとした。

今日のお遊びはここまで。あとは適当に友達と合流してカラオケにでも行こう。そう思って、栞から視線を外した、その瞬間だった。

——ギリッ。
「……え？」

続きは製品版でお楽しみください！！